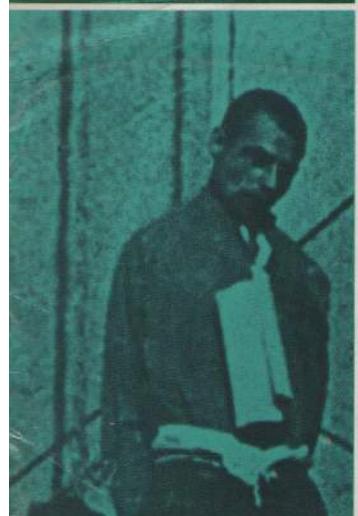
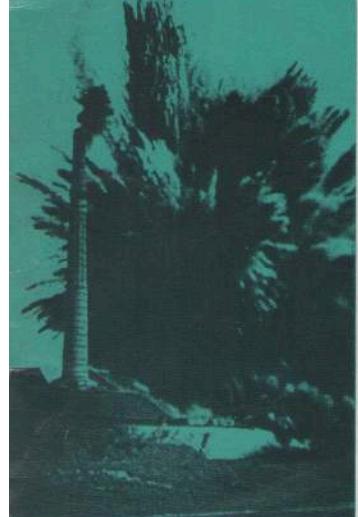


ORDINARY FASCISM

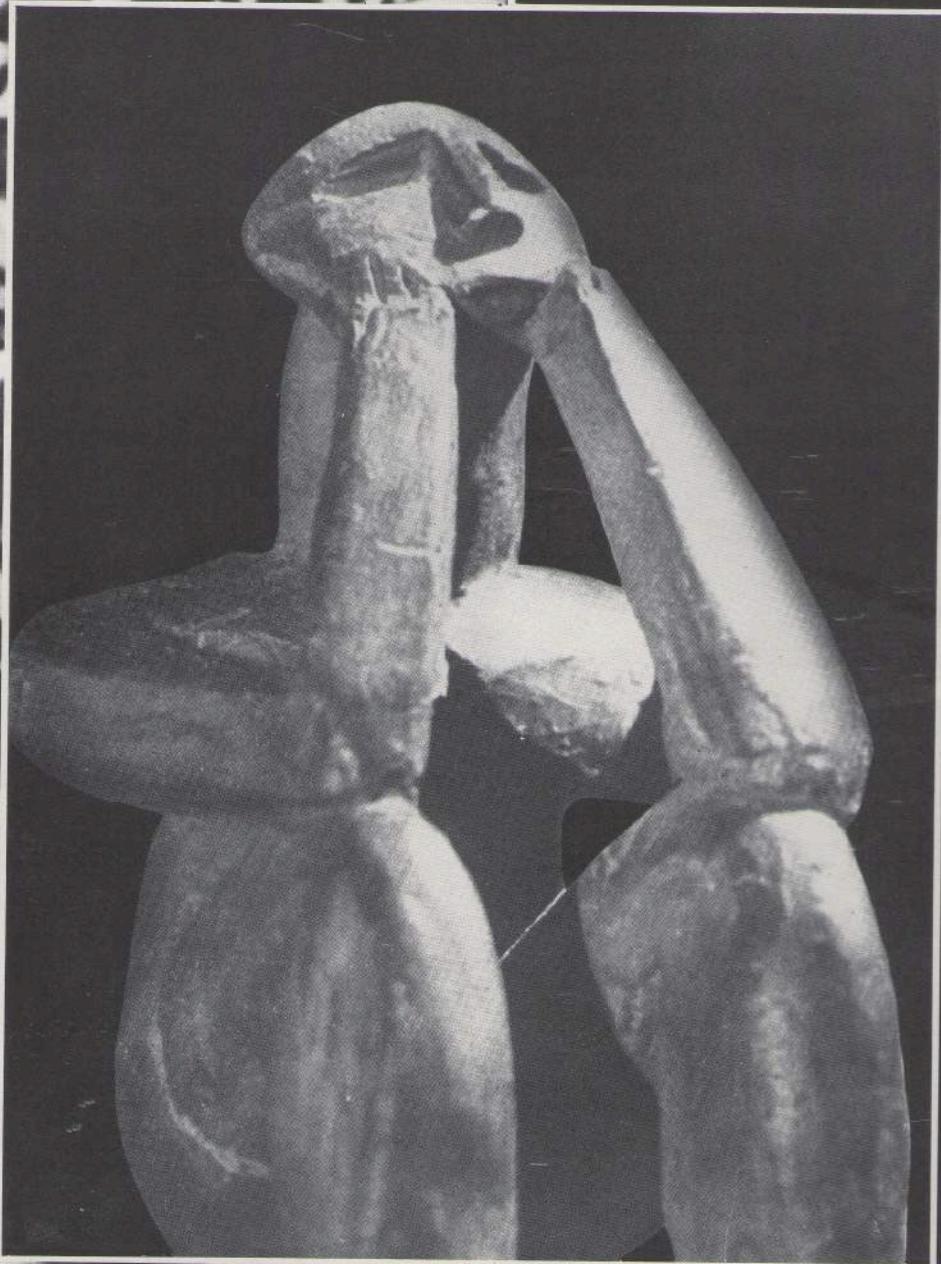
野獸たちのラーラー

ありふれたファシズム



東宝

丸の内東宝



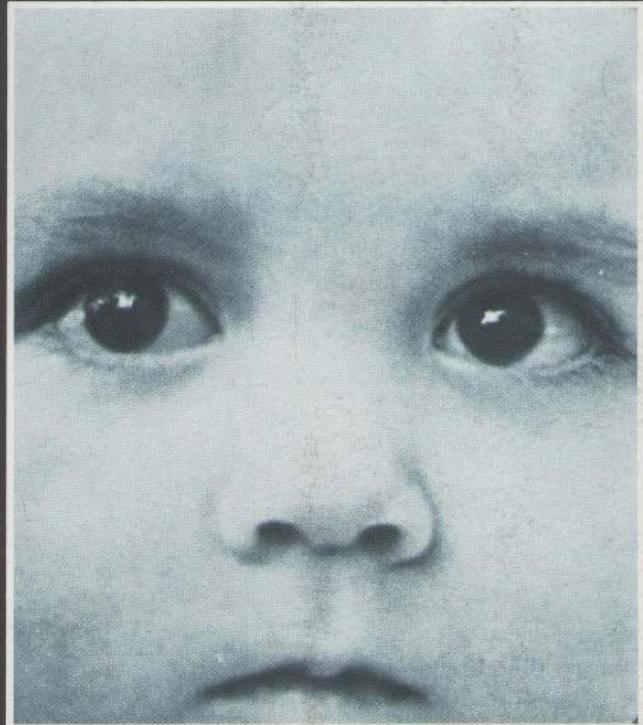
**ORDINARY FASCISM.
LE FASCISME TEL QU'IL EST.
EL FASCISMO CORRIENTE.**

野獣たちのパラード

——ありふれたファシズム——

製作 / モスフィルム

配給 / 月の輪映画株式会社
日本海映画株式会社



ライブチッヒ国際記録映画祭・グランプリ受賞作品

優秀映画鑑賞会・推せん
日本映画ベンクラブ・推せん
全国文化運動協会・推せん
日本Y M C A 同盟・推せん
都教組・特選

◀ 解説

この映画は、ファシスト・ドイツの記録映画である。しかし、これを単なる過去の出来事とか他人事と考えるのは間違っている。もし、ファシズムが、今これを読んでいるあなた自身の心の中にある、と言ったらあなたは信じられるだろうか？

だが、この映画は、あなたにもファシストの資格があることを告発する。ファシズムは人間が思考を放棄したときに起る、と、この映画は結論している。ナチス・ドイツの記録映画は今までにも数々あった。が、この「野獣たちのパラード」は単なる記録映画ではない。記録フィルムを使って、まったく新しい世界を創り上げた、ミハイル・ロンム監督の観客に対するメッセージであり、一種のエッセイであり、人類の未来に対する警鐘である。

この映画は、ヒットラーだけがファシズムを世にひろめたのではなく、ファシズムがあのように拡がったのは、民衆それ自体の持つ特性でもあることを証言する。そして、大平原に明け暮れる昨今、民衆の、いやあなたの心の中に巣食うファシズムの種子を、白日の下にさらけだす。

ヒットラーは、民衆の心を知っていた。それはヒットラーの心と共通するもの、ファシズムだった。

ヒットラーは、ドイツ人の群衆心理を代表し、具体化し、拡大し、大衆に行動方向を指示した。

ヒットラーの狂気は、平凡で善良な個々のドイツ人の日常的狂気の集約であった。この、ありふれた「日常のファシズム」（原題）が、ナチのファシズムという巨大な化け物にふくれあがった。日常の狂気はヒットラーの大狂気となり、それが何千万ドイツ人の行

動によって拡大再生産されたのだ。

この場合、ヒットラーただ1人が個性をもつ人格者となり、ドイツ人は個性を失ない、人格も人権も失なった。「私が考え、お前たちが行動する」。かくて、すべてのドイツ人に思考停止がはじまり、ドイツ人は行動する口ボックの大群となり下った。

かくして、世界史上まれに見る、おそるべき悲劇が展開されたのだ。が、この映画は、そのいきさつ、そのメカニズム、ヒットラーとドイツ人とのかかわりを、機智とユーモアをまじえながら、生き生きと展開する。

そして、現在、世界のあらゆる国に、またもファシズムへの道がひらけていること、この日常的なファシズムが再び民心に根をおろし、思考停止がはじまっていることの警鐘をならしている。

監督は名作「10月のレーニン」で有名な巨匠ミハイル・ロンム。ドキュメンタリーはこれがはじめてだが、それだけに今までの記録映画とはまったく異なる手法を使って、民衆の心の中にあるファシズムへの道を明らかにする。

日本でも、高度成長、高物価、高税金、インフレ、そして環境破壊の現在では、T.V.、マンガ、CM、工口映画、オリンピック、万博、競馬、ボウリング、マスプロ・マスセール、マイホーム、マイカー等々にかこまれて、平均的日本人の思考停止（または思考衰弱）が急速に進行している。

これと平行してか、差別と人権無視、そして再軍備が進行している。

思考停止のあるところ、ファシズムあり、それが、この映画の証言であり、未来への警鐘である。

▼ スタッフ

監督 ミハイル・ロンム

脚本 ミハイル・ロンム

マイヤ・トウロフスカヤ

ユーリー・ハニコーチン

撮影 ゲルマン・ラウロフ

日本語版解説 宇野重吉

モスフィルム 1965年度作品

上映時間 2時間9分



ドキュメンタリィの魅力は「事実をして語らしめる」ことに尽きる。ただ、事実はあくまで事実であり、真実の近似値ではあっても真実そのものではない。したがって、「事実に語らしめ」ながら、真実を発見する作業には、人間の精神の介在を必要とする。ドキュメンタリィが、ある種の感動や恐怖をわれわれに与えるのは、この精神の介在が適確に行われたときである。

この映画における最大の価値は、事実の積み重ね作業の底に光る、人間の眼のすばらしさである。その眼は、歴史の“語り部”的ものであることはもちろんだが、それを超えて、詩人の眼であり文学者の眼である。これまでの“ヒトラー告発”の映画が、ヒトラーとナチズムを政治悪として描いていたのに対して、この映画は“人間悪”として描いている。ここに、この映画が既存のフィルムを使いながら、しかもすぐれて現代的な意味をもつてゐるのがあるのだ。

「あの勤勉で有能で、偉大な芸術作品を数多く創出したドイツ人が、なぜヒトラーの狂気にまきこまれたのか」という疑問は、ヒトラーとナチズムの破滅後20数年たったいまでも、

鏡の前で恥部を見るような映画

評論家 草柳 大蔵



世界じゅうの人の胸にわだかまって離れえない。ことにわれわれ日本人は東条軍政時代を経験しているし、集約的な心理状況に陥りやすい習性を持っている。それだけに「あの勤勉なドイツ人が、なぜヒトラーという一人の狂気に」は、われわれ自身に対する問いかけであり、鏡の前で自分の恥部を見るような恥ずかしさを覚える設問なのだ。

それだけに、私は原題の「ありふれたファシズム」に触れたときに、妙な不安感に捉われるのを防ぐことができなかった。それは、戦後25年間の民主主義がじつは白色の紙であって、いつかはごく日常的にファシズムの色に染まるかもしれないという恐怖感と隣りあわせになっているのだ。

皮肉なことに、この映画はそういう民主主義のもつ恐怖や不安に対して、慰めの言葉をかけるどころか、やさしい言葉と鮮明なレンズを通じて、その可能性をびっしりと書いてみせるのである。

ある場面で、私は「ドイツ国民には勇気がなかったのだ」と思い、また、ある場面では「このような突撃隊ができるまえに叩くべきであった」と叫んでいる。必死になって、ナチズムへの傾斜と闘ってみるのだ。が、やはり、事実の重味は残酷なほど確実であった。

私は、ずいぶん“ヒトラーもの”を見てきたつもりだが、それでも新しいシーンをふんだんに見せつけられ、またムッソリーニの写真をはじめて見ることができた。このファシストの大将は、なんとも下品で無学そうで、吹き出しだくなるほど滑稽な風貌を持っている。見るからに人間的にも劣等な人種と直感することができる。しかし、この卑しげな男がイタリアを支配したことは事実なのだ。

私は、暗い座席で何度か舌打ちをした。それは、この映画があまりに明快にわれわれの情況を語っていることに対する、いきどおりのような、あるいは恥ずかしさのような、奇妙な思いのカクテルが立てさせた舌音であった。

ミハイル・ロンムのこと

記録映画監督

岡田一男

ミハイル・ロンム監督紹介

1901年1月24日イルクーツクに生まれた。ソ連邦国民芸術家の称号を持つ（1950年）。1918～1921年赤軍服務。除隊後、国立芸術技術大学（ВГХТУ）に入学、彫刻科卒業（1925年）。同大学在学中より、そして卒業後も文学、演劇関係の仕事（雑誌寄稿、フランスのゾラやフローベルの作品翻訳、モスクワ・クラブの舞台で俳優として出演、展示会のデザインやポスター制作など）をし、この間に脚本を書く経験を積む。

映画関係の最初の仕事は同大学の課外の仕事で児童映画の手伝いをした。1928～1930年間に約10本脚本を書いた。その中、幾つか採用になって上演された。（「生活は燃える」「雪辱戦」「我々と共に」「死のコンベヤー」）

1931年、監督A・マチエレートの助手として「事業と人」を演出。

1934年、モーバッサンの原作で「脂肪のかたまり」を独自で監督（脚本もロンム自身—サイレント映画）。この映画でデビューしたが、適確な人物描写、経済的なフィルムの長さの利用、言葉でなく俳優動作による劇の内的描写などの点で彼が非凡な監督であることを実証した。

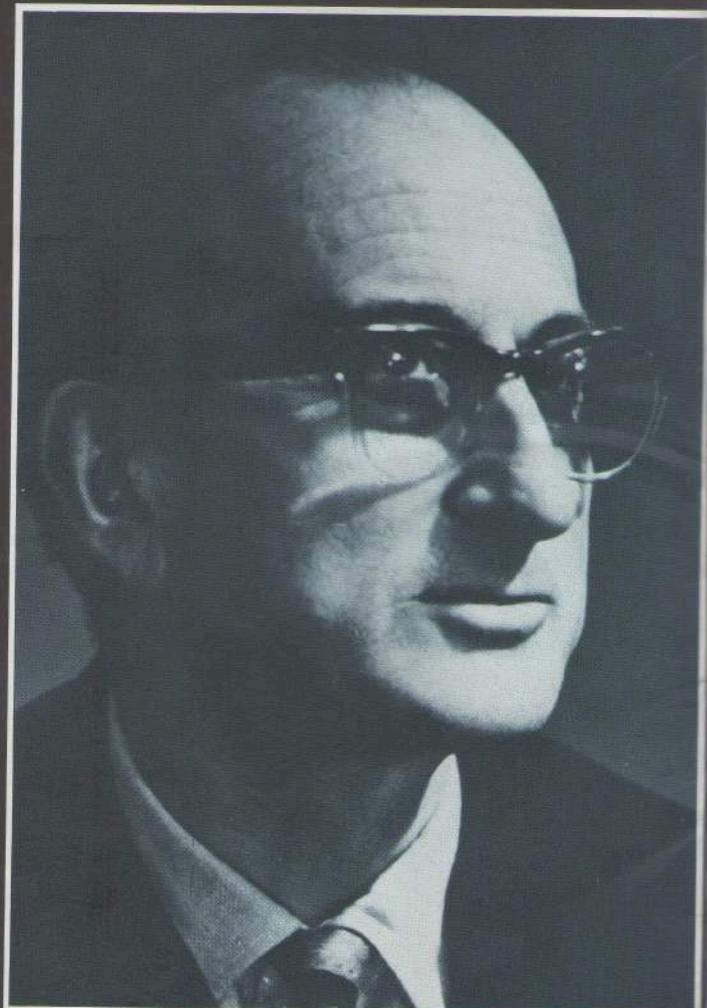
その後1936年「13人」で、カラ・クムの砂漠で活躍するソビエトの名もない兵士を描いているが、前作のモーバッサンと非常に共通したものが感ぜられる。

彼は、映画と同時に、映画俳優劇場の舞台で芝居を演出している。

即ち「罪なき罪人」（タシケント・1942年）、「私を待て」（タシケント・1943年）、「深い根」（モスクワ・1947年）、「ガーリーの幸福」（モスクワ・1948年）。

1954年から、映画俳優劇場の芸術指導者となった。そして国立映画大学（ВГИК）の監督科と演技科の教室を持ち、若い監督の指導に当っている。

「モスフィルム」スタジオの制作班の指導者でもある。



MIKHAIL ROMM

ミハイル・イリイッチ・ロンムは、1920年代後半に映画界入りした、いわばソ連映画の第二世代に属する映画人だが、既に多くの古参映画人が世を去った現在では、齢70歳の現役映画人中、最長老のひとりとして、レニングランドのグレゴリー・コジンツェフとともに特異な位置を占めている。

彫刻家として出発した彼の第一作は、モーバッサンの「脂肪の塊」の映画化（34年）であったが、フランス文学への深い素養は、エミール・ゾラの小説、たとえば「居酒屋」の翻訳者としても知られている。

第二作の「13人」（37年）は、カラクム砂漠での赤衛兵と反動匪賊の闘いを描いた、諸々の活劇映画の元祖となり、続くレーニンについての二作品「10月のレーニン」（37年）と「1918年のレーニン」（39年）は、「銃砲から政権が生まれる」（毛沢東）普遍的真理を描いた作品として文革下の中国で大々的に再上映された、数少ない劇映画・外国映画・ソ連映画である。

戦争をはさんだ数年間は、彼の最も多作な時期で、ソ連周辺の国々を題材に、主要テーマとして反ファシズム闘争をとりあげる。「夢」（43年）、「人間217号」（45年）、

「密使」（50年）や、その延長として、シーモノフの戯曲「ロシア問題」の映画化（48年）など。そして既存フィルムを再編集した記録映画「ウラジーミル・イリイッチ・レーニン」（49年）、また彼の創作活動の一大転機となった「1年の9日間」（62年）のソ連の現代を真剣に見つめた視角が、「ありふれたファシズム」（65年）に結実したのである。

しかし、その背景にはもうひとつ、60年代前半に、ソ連芸術界に吹き荒れたフルシチョフによる、口バのしつぽ批判といった、表面的には、イデオロギー強化、実質は単なる保守化にすぎない引締め政策への彼の回答がある。フルシチョフにより、公式文書上で名指しで攻撃された唯一の映画人であったロンムは、持病の心臓病を押して頑強に抵抗したばかりか、モスフィルムの若い映画人や映画大学を卒業してまもない教え子たちを四方からよせられる非難から庇つたのである。その代価として、彼は一時、映画大学の監督科劇映画コースの担当教授を辞すことをよぎなくされ、また心筋梗塞の悪化をもたらした。小康をえた64年、彼は過去の、ソ連の敵対物を通じて、現代をえがこうと意図して、この記録映画を編集した。それは決して西側世界に対する警告だけではなく、

現代のソ連のもつ体質への警鐘でもあった。65年、教師に去られて失望していた我々はモスフィルムの試写室で、最初にあがつた数巻を観て、ロンムの健在に深く勇気づけられた。社会党の招待で67年に来日した際、彼は当時のことを「あとにもさきにもあんなに沢山のフィルムを一度にみたことはない。それまで自分のみた映画の総てよりも、もっとずっと沢山のフィルムを観た。」と語り、今度は「世界の青年問題」を扱った記録映画を、西ドイツのバヴァリアのテレビ映画のプロデューサーの資金で製作しようという、いささかソ連映画の枠からはみでた大企画を熱心に語って、日本の部分はお前がやれと私をアッサム。大いにのせられてハンティングに精を出したのだが、帰途モスクワへ飛行機がつくと、彼の心臓病はまたも悪化して病院へ直行となり、バヴァリアのプロデューサーとの話もこじれてしまったらしい。翌68年夏に、モスクワに立寄った際、郊外のクラスナヤ・バフラ村の別荘で静養中のロンムを見舞って、企画のつぶれたことを確認した。心臓の調子を気にしながらも、医師の節煙の勧告を無視してチェーン・スマーキングをやめず、彼は次なる構想を練り、カセット・テープへ自己の回想を吹きこんでいた。彼の書斎の板壁は、ありとあらゆる大工道具が飾られ、彼の道具好きの一端をしのばせてくれた。そこで彼は、自己を、「私はソ連の小市民なのだ」としばしば語った。強烈な批判精神に裏打ちされた、鋭い皮肉をとばしながら、モスクワ映画界の状況を語る彼の深い洞察力に私は卒直に感心し、数時間は、またたくうちに過ぎ去った。その一方で彼の中国革命に対する理解の浅さ、一面性に若干の不満と一つの限界を感じなら、複雑な気持ちで私は彼に別れをつけた。現代ソ連の持つ深い矛盾を憂慮する彼は僅作な監督であり、最近15年に二作品しか完成していない。それは偉大なソ連の映画人に共通する、企画だあれに終る構想のきわめて多いことを意味している。

彼は現在、モスフィルム撮影所の第三創作連合「同志」と附属の高等監督コースの指導者であり、また全ソ国立映画大学監督科の教授として心臓病と闘いつつ、結構多忙な毎日を、モスクワ都心のゴリーキー通り8番地の高級アパートと郊外の別荘を往復しながらすごしている。

71年、フルシチョフは他界し、ロンム先生はカセット・テープにどんな心境を語っているのか、気になる今日このごろである。

ORDINARY FASCISM. LE FASCISME TEL QU'IL EST. EL FASCISMO CORRIENTE.

この映画は、15章の物語詩形式である。

〈プロローグ〉

この映画で、ファシズムのすべてを語りつくすことはできない。膨大な資料のなかから、驚くべき事実、また意味深いものを選びだし、観客とともに考えていこうとするのである。

▶ 内容



第1章

「新しい博物館」

子供たち。世界のどこの子供たちもみんなかわいい。子供たちの描いた絵。
——突然、ドイツ兵が、子供を抱いた母親を射つ。——そして、何万という女たち子供たちが死の収容所へ引きた

てられる 煙突のある博物館、かつての強制収容所である。

第2章

「わが闘争」
あるいは「牛皮の加工法」

ヒットラー著「マインカンプ(わが闘争)」の特製豪華本が作られている。

特製の箱におさめられ、千年の間、御

きて間もない、ある右翼党調査を命じられた。

この党が気にいって入党したヒットラーは、ここで頭角をあらわし、その名も国粹社会主義ドイツ労働党と改名、ヒットラーは総統の地位についた。ナチス・ヒットラーの誕生である。

ヒットラーは総統らしく振舞うのに苦心慘胆、涙ぐましいほどの稽古、ジエスチュア入り大演説の稽古、稽古。そして、本番。

第4章

「その時代」

そのころの世界。各国のオエラ方も、ヒットラーが政権をとれば世界は安定すると考えていた。

ユーゴのアレクサンドル皇帝が、外相バルトーの招きでフランスへやってきた。ナチの動きを心配したのだ。だが2人はナチのテロで落命した。

第5章

「第3帝国の文化」

「曹長なら誰でも教師になれる。しかし、教師なら誰でも曹長になれるとは限らない」——アドルフ・ヒットラー

ヒットラーが政権を握ってから3日間、絶えまない松明(たいまつ)の行進。人びとは熱気の中で我を忘れ、自分が英雄になったような錯覚におちいった。第3帝国に必要なのは、考える人間ではない。ナチズムに反対するものを容赦なくたたきつぶす野獸なのだ。

ドイツ大学で、ゲッベルスの演説。興奮した学生たちが、それまで親んできた書物を炎の中に投げ入れる。

第6章

「実際に生かされた偉大なる民族の思想」

ナチス流種族理論では、頭骨のプロポーションが重要。ナチス優生学を信

拝する教授が学生の頭を測っている。

——そして、ドイツ中の大掃除がはじまる。いち早く国外に去った「不正頭骨」の持主は賢明だったが……。

第7章

「1つの民族 1つの帝国 1人の総統」

ドイツ民族は団結しなければならない。国民は決められた日に共同炊事のスープを飲んだ。こうした連帯運動は全国にひろがる。元帥ゲーリングも庶民的なところを見せる。

第8章

「自分自身について」

「私の母は平凡な女だったが、ドイツに偉大な息子を贈った」——アドルフ・ヒットラー

無数の演説をくり返すヒットラー、その型と見本。今や大タレント。

ヒットラーは、ついに、自分に最もふさわしい威儀と優雅なポーズを発見した。——總統を見習えば間違いないと、レームもヘスも、やがて全部下ガサル真似をする。

さて、ファシズムとはイタリア語で、ムッソリーニがその先輩だ。ナチ的敬礼も、ムッソリーニを真似したもの、自己宣伝もムッソリーニが上だ。彼の演説ぶりは、まことに愉快。この百面相。もう1人の大タレントというわけだ。

第9章

「芸術」

「俳優や芸術家たちは、ときどきどうしつける必要がある」——アドルフ・ヒットラー

ヒットラーが美術館へ行く。ヒットラー好みのものばかり。バカでかい大彫刻もある。

ゲッベルスは、作家たちに、何をい



靈屋にしまいかれる。

第3章

「『わが闘争』の著者について」

ヒットラーは下級官吏の子としてオーストリアに生まれ、20歳のころは絵描き志望、第一次大戦で伍長に昇進。戦後、国防省関係の情報係となり、で

いかに書くべきか訓示する

だが、一番優れた芸術はパレードだ。民心をひとつにまとめ、ひとつの目的に結集させる、これ以上のものがあるだろうか。これを演出するのは一人の男、これだけの名演出家は歴史上2人とはいない。

第10章

「我等は総統のもの」

第3帝国の子供たち、学校で最初に習うのが「ハイル・ヒットラー」、そして救世主ヒットラーの詩を暗誦させられる。

少女たち、少年たちにとって、総統は絶対だ。神様以上だ。ヒットラーにとって、子供たちは粘土細工のように、どうにでも変えることができた。

こうして兵士になった、昨日までの少年が、見事に整列して、ヒットラーに宣誓する。

この宣誓は人間であることを停止することだ。人間の権利を自ら進んで放棄してしまったのだ。

第11章

「別のドイツが存在したのだ」

別のドイツが存在した。ロシア革命後の1918年、ベルリンは武装した労働者にあふれていた。リープクネヒトとルクセンブルグが殺され、革命は血で肅清された。

1920年代、労働者階級の斗いは、ナチの徹底した弾圧で断念された。

それでもデモは行なわれた。この人たちの多くは消え去った。鉄条網の向こうへ。

第12章

「大衆と接するには女に接する如くせよ」——アドルフ・ヒットラー

ナチズムの根本思想は、個人の価値の抹殺だった。ただ一人を除いては、

子供が花束を捧げる。ヒットラーが抱きあげる。感動的なシーン。涙を拭く女たち。手をさしだす女たち。「大衆と接するには女に接する如くせよ、大衆は女と同じように力の強い者に服従したがるからだ」とヒットラーは断言する。

第13章

「総統が命令し、我々は実行する」「ドイツ民族の福祉のため我々は15年ないし20年毎に戦争をしなければならない」——アドルフ・ヒットラー

その時がきた。スペイン内乱をきっかけにドイツ空軍出動。「総統が命令し、我々は実行する」そして、あのケルニカの悲劇

そしてワルシャワ爆撃 廃墟

爆撃 逃げまどろ人々 廃墟

連行されるユダヤ人

ついに、ソ連へ無警告攻撃開始。この日のモスクワ 平和な市民たちのたたずまい

第14章

「ありふれたファシズム」

ソ連領を進撃する兵隊たち、ハンサムで教養もありそうな青年たち。その青年たちが平然と市民を射つ

兵士たちの胸のポケットに写真があった。妻や子供たちの写真と一緒に、人間として最も恥すべき行為の記録写真を持ち歩いていたのだ。裸の女2人、裸の姉とスパンを脱いでいる弟、壁に並べて銃殺、最もひどいのは、吊るされる女の死体の傍で笑う記念写真。そしてリボフ（ウクライナの都市）の大虐殺

ウクライナから掠奪した食料品の特売日 国営レジャーセンターの観光旅行が、ワルシャワのゲットー（ユダヤ人住宅区）へ行く

飢えた子供たち 子供たちは絵を書いた 鉛筆はない ハリ絵だ

やがて貨物列車で強制収容所へ送られる。作家コルチャクは自らゲットーに移り住み、最後のガス室まで、子供たちの話相手になってやった。

収容所に列車到着 選別、すぐ殺されるものは左へ 裸の女、裸の男たち、



等々

ノルマを果たした収容所長の家

クラーメル博士の収容所日記

第15章

「第3帝国の終末」

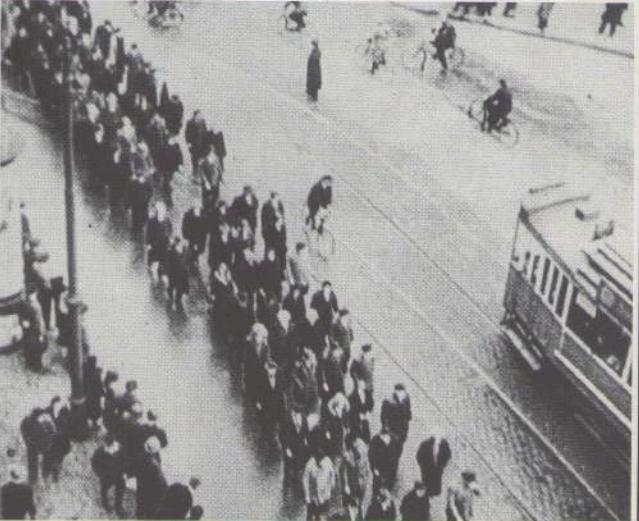
冬将军到来、戦況は一変した。ゲッペルスは全面戦争の必要を説きつけ

る。聞く人間の顔つきが変わってくる。
習慣が身について「ジーグハイル」を
くりかえすが、彼らはやっと考えはじめた。

ヒットラー最後の姿、少年兵を閱兵する。

〈エピローグ〉

破壊された学校へ通う子供たち。相



変らす子供たちは面白い。スクスク育
っている。

子供たちはみんなすばらしい。どこの
国の子供たちも。——要は、私たち
がどう子供に教え、どう育てるかにか
かっている。



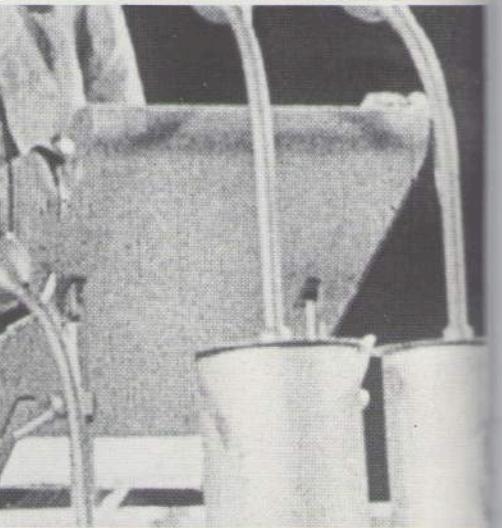
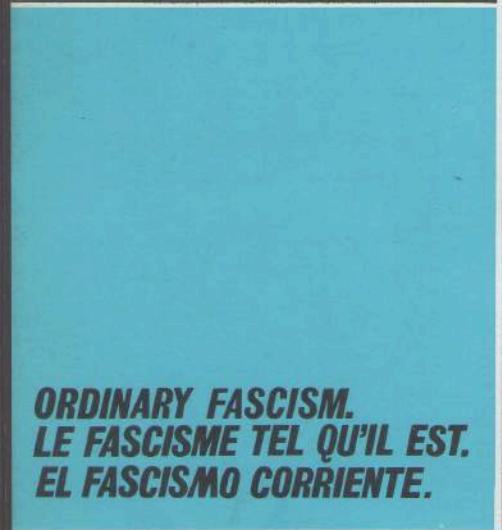
私はこの映画でファシズムの姿を、その総てを明らかにしようなどとは思わない。

わずか1本の映画でそれを語り尽すのは不可能なことだ。

歴史上の重要な事件が全てフィルムに記録されてるわけではないからだ。

そこで私は全力をあげて最大な資料の中から驚くべき事実、また意味深いものを選びだし、あなた方と一緒に考えて行きたいと思ったのだ。

——ミハイル・ロンム

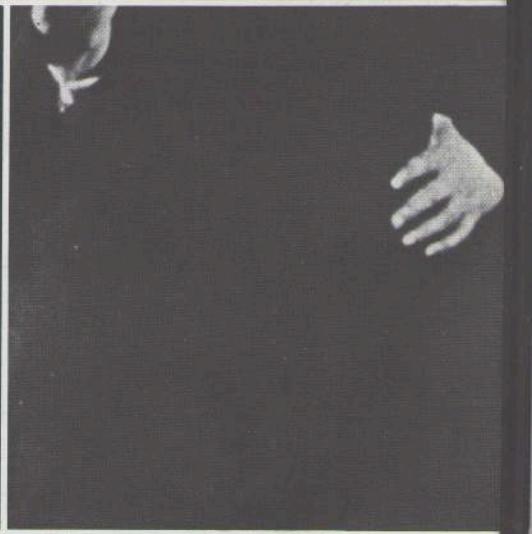




これはナチズムについて、あるいはナチズムの製作について物語る歴史的な記録映画などではない。

この映画の重要な目的は、ファシズムをあの時代の典型的な現象として理解し、その根源を明らかにし、当時のふつうのドイツ人の精神を証明し、なぜ彼らがヒトラーに従っていったか、いかにしてナチズムが彼らの弱点を見出し、それをうまく利用したかを説明することにあった。

スクリーンにうつるあらゆるシーンは観客

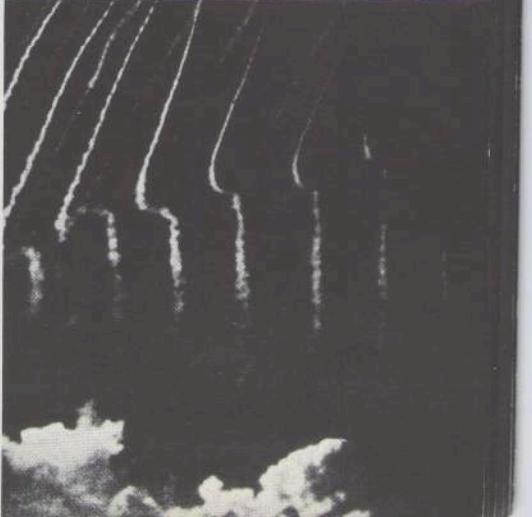
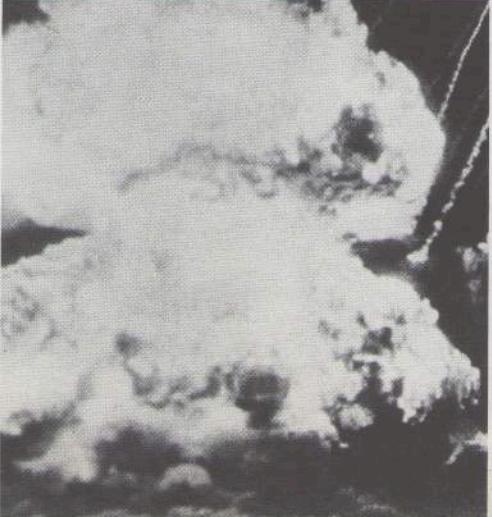
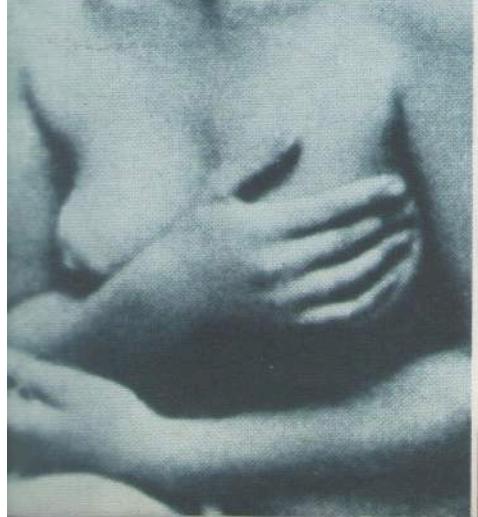
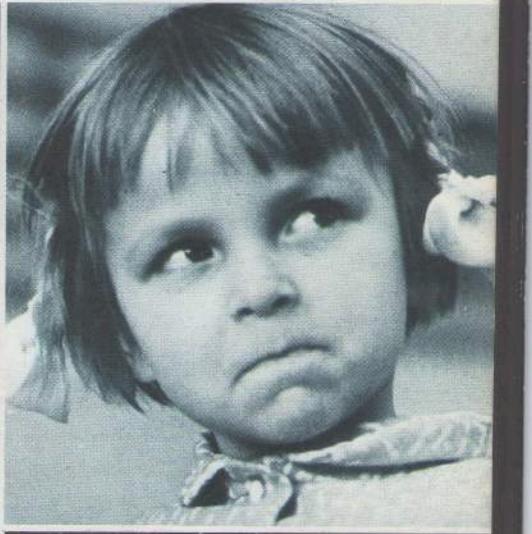


に警戒心を起こさせ、考えさせずにはおくまい。

この映画は人々の心に驚きと希望をもたらし、未来に対する人類の責任を語りかけてくるにちがいない。

我々は、この映画を見る人々と共に、ファシズムについて、ファシズムを生み出す土壤について、人々を野獣にかえることによって人間を破壊してゆくやり口について考察し、人間が人間であるために何がなされねばならぬかを深く考えたいと思う。

——ミハイル・ロンム





日常的な
訓練をつうじて
つくりあげられてゆく
ファシズム！

映画評論家 佐藤忠男



映画「ありふれたファシズム—野獣たちのバラード」を見て、とても面白く、また感動した。ヒットラーとナチズムを扱ったソビエトの長篇記録映画だと聞いていたので、ああ、またアウシュビッツの惨状をいやというほど見せられる、例によって例のようなものだろうと思い、ソビエト映画ならば、ナチス批判の論理も見ないでも分るようなものだし、と、じつは、見に行く前からすっかり内容の見当がつくような気がしていて、期待はしていなかったのである。なにしろ、「13階段への道」とか、「わが闘争」とか、「ワルソー・ゲットー」とか、ナチスの犯罪を扱った映画はこれまでにずいぶんあり、死骸の山を見せられることに、われわれは、いささか食傷している。

しかし、「ありふれたファシズム—野獣たちのバラード」は、そういう映画ではなかった。アウシュビッツもワルソー・ゲットーも出てくるが、それだけではなく、また、その惨状を見せるなどを主なねらいにしている映画でもなかった。

言うまでもないことだが、ナチズムを起したドイツ人も、世界のどこの国の入間ともおなじ人間なのである。アウシュビッツやワルソー・ゲットーをみると、とても普通の人間ならあんなことがやれるわけはない、と思ひがちであるが、普通の人間である彼らが、ナチズムに訓練されることによってそれがやれた。では、どんなふうにしてナチズムはドイツ人を訓練していったのか。その過程を、第一次世界大戦後から第二次大戦終了にいたるまでの、主としてドイツにおけるぼう大な量のニュース映画のなかからさぐり出してきたのがこの長篇記録映画である。ファシズムというものは、ある日とつぜん起きるというものではなく、全国民的な規模における日常的な訓練をつうじてつくりあげられてゆくものである。その意味では、やっている本人自身はそのことについて特に意識してはいないようだ、たいたこともない日常な出来事や行動が、あとから考えると、ファシズムへの道の一歩一歩であったということがいっぱいあるはずであり、そのつみ重ねが、のっぴきならない段階にまで達したときに、アウシュビッツやワルソー・ゲットーが起る、とも言える。その、当時は人々が何気なくやっていたようなことが、ニュース映画に記録されていて、それをいま見ると、そこにまぎれもなくファシズムへの一歩が見られる。そうしたフィルムを、かつてのドイツのニュース映画からたんねんに拾い出してつなげてみる

と、われわれは、知らぬまにいつの間にかファシズムにからめとられているということの可能性を、いやというほど思い知らされるのである。

ヒットラーは、その著書「わが闘争」を、一冊だけ、手書きの超豪華本につくらせて永久保存させようとした。この映画は、ヒットラーがそれほど神聖なものとしてドイツ人におしつけたこの本の各章の題名と、そのなかのヒットラーの言葉を要所要所にはさみながら、ヒットラーの言ったことが、じっさいにはどう実現されていったかをニュース映画で示す。民衆煽動術、反共キャンペーン、インテリ退治、画一化、軍国化、等々、ヒットラーの得意の方法論とその実際が、ヒットラーの言葉と、その実際で示される。たとえば、ヒットラーは民衆に見せる自分のポーズというものをたいへん工夫した。若い頃、彼がいろんなポーズを工夫していたことを、当時の写真で具体的に示す。結果彼は、両手を腹のところで軽く握る、というポーズにおちつく。するとヒットラーの子分たちもそれをつぎつぎに真似してゆくようになった。ということが、当時ヒットラーが党の幹部たちと一緒に撮ったたくさんの記念写真を時期を追って並べてゆくことで具体的に示している。この画一化というものをドイツ国民に押しつけるために、国民ぜんぶが地域ごとに街頭でおなじ鍋のスープを一緒に飲むというような行事が奨励されていたことが示される。飲んだあと若干の金を献金するのだが、ヒットラーの献金ぶりなども紹介されており、そういうこまかい場面場面がユーモアもあってたいへん面白い。われわれはそれを見て笑う。しかし、紀元節の復活が行なわれ、その日には日の丸の旗を立てることが奨励されている今日の日本の状況は、ということとは関係ない、と言っていられるものなのかどうか、考えさせられるところである。ムッソリーニの演説など、いまから客観的にふり返ってみれば、いかに俗物臭ふんぶんたる滑稽なポーズと表情のくり返しにすぎなかつたか、ということが、じつにユーモラスに示されている。しかし、こういう雄弁術に多くの人々が口口りとまいつてしまつたのである。三島由紀夫の切腹が、10年後、20年後に、滑稽さわまる風俗的な事件としてふり返られるか、それとも、なにやら悲愴な伝説にまつりあげられてしまつてはいるか、それは、10年後、20年後の人々の問題なのではなく、まさに現在のわれわれ自身の問題なのであるということを痛感しないわけにはゆかない。

「無知で文化のまことに民族ならともかく、あの高度に発達した工業社会に生き、文化程度の高い、あるいはワイマル憲法というきわめて民主的な憲法をもっていたドイツ民族が、どうしてあのような知性のない、いや、狂気とも野蛮ともいえるヒットラーのとりこになってしまったのだろうか？」という問い合わせよく出されます。

しかし、この問い合わせのうちに、すでに二つの前提がなんの証明もなくはいりこんでいるようです。一つは、民主的社会に住んでいる文化的な民族は、ファシズムにやられる筈はないという無意識の前提です。もう一つは、ヒットラーを知性のない、狂人、野蛮人であると見る前提です。

しかし、この二つの前提は正しいのでしょうか？ もしヒットラーが狂人であり、ナチスが巨大なる狂人集団なら、それを選び出したドイツ国民も決して知性があるとはいえなくなります。ところが、ヒットラーを狂人、少くとも性格異常だとする見解は、かなり広くそしてつい最近まで強く支持されておりました。ヒットラーの侍医だった男などの手記が公開されたためでもあり、また、戦争中ナチスに迫害された人たちの強烈なうらみの気持ちが、どうしてもヒットラーを正常人だと見ることにがまんできなかったのでしょう。「第三帝国の興亡」を書いたウイリアム・シャイラーらには、このうらみの念が強く感じられます。

また、ヒットラーは若い頃梅毒にかかり、一度はなお

ったが、独ソ戦の頃からまたその症状があらわれてきたとか、パーキンソン氏病の徵候もあったとか証言する人もでましたが、これらにはいずれも確証がなく、歴史家の信するところとはなっていません。またヒットラーには対女性的態度において、強いコンプレックスがあったようですが、この程度のこととてくに彼を変質者扱いにする必要はなさそうに思えます。

「野獣たちのバラード」でも、ヒットラーの熱狂的な演説ぶりをからかったところがあります。ちょっと異常ではないかと言いたげで、「ありふれたファシズム」というテーマと矛盾する印象をうけます。たしかにヒットラーはしゃべっていると、だんだん興奮してくる雄弁家でしたが、それを滑稽とか異常とかするのは、現在の時点からふりかえってみるからでしょう。当時はあの演説のスタイルは聴衆に十分迫力と感銘とをあたえたらしくあの熱情は本当に国を思い、不正に対し民衆とともに怒っているという感動をよびおこしました。しかもその演説はよく計算され演出されたもので、感情のおもむくままの、即興的なものでは決してなく、冗談一つまで原稿にきちんと書きこまれてあったということです。

この映画のなかでも、花束を捧げる子供をヒットラーが抱き上げたり、女性たちが泣き出したりするシーンがありますが、演出なのか、民衆の自然の感動なのか判然としない見事なものです。しかし、こんなシーンはアメリカの大統領選挙やわが国の選挙戦でもときどき見られることを考えると、ヒットラーがとくに異常だったわけではなく、大衆の心理、なかでも女性の心理をちゃんと心得ていた大タレントという感じがいたします。これにはのち宣伝大臣となったゲッベルスの演出力の功績も大きいですが、ヒットラー自身、いざ本番となると、どこまでが演出か、どこまで本気なのか自分で区別でき

ヒットラーをどう見るか？

東京大学教授 西 義之

ぬほどその役柄にとけこんでしまうところがあったようです。その点、かなりカリスマ（教祖）的な人物だったのでしょう。

もしヒットラーとその一党を狂人集団だとすると、彼らに拍手をおくったドイツ人たちまで狂気にとらえられていたことになり、ナチス時代は長いドイツ歴史のなかで、狂気の突然変異の現象と見なければならなくなり、ありふれたものとは言えなくなってしまいます。

私もナチスを「ありふれたファシズム」と見たい一人なのですが、この見方にも二つあるようです。一つはイデオロギー的な観点に立つもので、現代の経済構造を資本主義とするならば、やがて国家独占資本主義、帝国主義となり、必然的にファシズムに変りうるとする立場です。この考え方方に立ちますと、ヒットラーもムッソリーニも、ファシズムが呼び出した道化役にすぎなくなり、彼らはその背後の黒い勢力によって踊らされていることになります。主役は糸をあやつって踊らせている独占資本家だったり軍国主義者だったということになるでしょう。

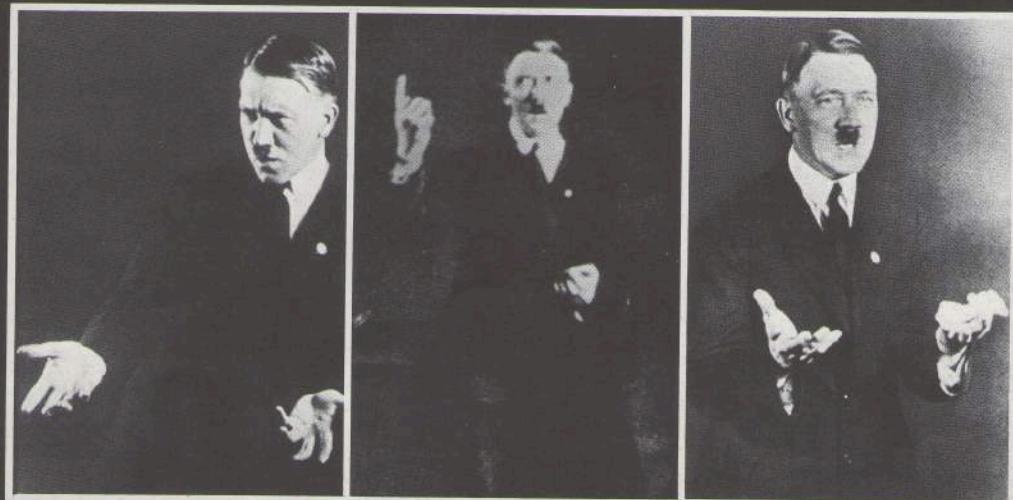
この映画は、露骨ではありませんが、ソヴィエトの映画らしく、この観点に立っているように思えました。ヒットラーの演説の工夫も、ポーズのとり方の苦心も、突撃隊の行進も、この観点からすれば、どこか滑稽で、マンガ的です。自分では主役のつもりで一生懸命気どっているのだが、背後にはもっとスゴイ奴がにたにた笑っているのだぞ——と暗示しているかのようです。映画の最後の10数分には、とくにそれが感じられます。こうなると、ヒットラーもムッソリーニも、ありふれた道化役にすぎなくなってくるでしょう。

この映画は1965年に製作されていますが、3年後の1968年8月、ソヴィエト軍はチェコに侵入しました。この

映画の第9章に「作家や芸術家は、ときどきぶんなんぐってやらなければならぬ」というヒットラーの言葉が出ますが、チェコだけでなく、ソヴィエトでもバステルナーク、ソルジェニーツィン、アマリクらの作家が「ぶんなんぐられて」いることを私たちは知っています。ヒットラーに対すると同じく、スターインにも救世主として讃える詩がささげられたことがあります。

従ってファシズムをありふれたとする見方は、どうしでももっと自由な立場に立たざるをえなくなります。それは私たちの民主主義体制とは全くべつのものではなく、民主主義とは地つづきのものだということではないでしょうか。アメリカでもソヴィエトでも、ひょっとすると日本でも発生しやすい——それゆえに「ありふれて」いると言うべきではないかと思います。

ヒットラーにおいて「ありふれて」いなかったのは、ドイツ民族を最良の民族だとし、ユダヤ人などを人間以下だと考えたその人種理論だったでしょう。これだけはいまから見て、最も異常な印象をうけます。しかしこの理論がなければ、あの大量虐殺はどうにも説明がつきません。もちろんこの理論もヒットラーの独創ではなく、ヨーロッパの一部に根づよかった思想でしたが、国家をこの思想実行の機関に仕立てあげたというのはただただ驚くばかりです。この意味でヒットラーを偏執狂的な人間だと見ることができるかも知れません。



ヒトラーがドイツの政権を握ったのは1933年(昭和8年)1月30日、ソ連軍包囲下のベルリンで自殺したのが1945年(昭和20年)の4月30日である。ヒトラーの率いるナチス党(国粹社会主義ドイツ労働者党)がドイツを支配したのはこの12年間であるが、その前半は侵略戦争の準備期、後半は侵略戦争強行の時期であった。ヒトラーとナチスのイメージは、なによりもまず戦争と切り離すことができない。

「アウシュヴィッツ」に象徴される怖るべきユダヤ人絶滅計画は、ヒトラーとナチスの拭い消すことのできない第二の相貌である。アウシュヴィッツでは、1942年の夏以来、約200万にも達するドイツ本国や西ヨーロッパ、南ヨーロッパから送られてきたユダヤ人がガス室で殺されたといわれるが、ユダヤ人の大量虐殺が行なわれたのはアウシュヴィッツだけではない。ヘルムノ、ベルツェク、トレブリンカ、マイダネック等の強制収容所でも、1941年末から1942年の夏にかけて、約200万のユダヤ人(主としてポーランドの)がガスで殺されたといわれている。もちろん、殺されたのはユダヤ人だけではない。たとえば、ワイマルの近くのブーヘンヴァルト強制収容所でドイツ共産党の指導者エルンスト・テールマンが殺されたように、ナチスに抵抗した共産主義者、社会主義者、自由主義者で死をまぬかれなかつた者は決して少くない。また、占領地域での住民虐殺の事例も決して少くないだろう。だが、ユダヤ人に対する組織的な絶滅計画ほど(ヒトラーはすでに1939年1月ヨーロッパのユダヤ人の絶滅を予言していた)ナチスの怖ろしい野獣性を物語るものは

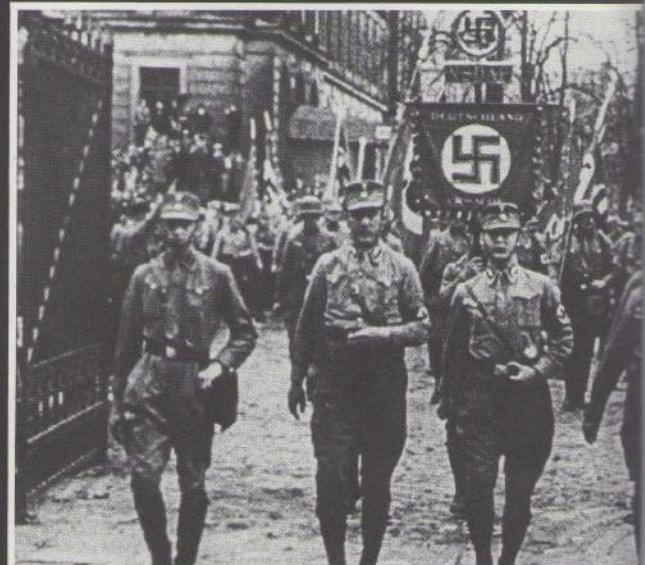
あるまい。

このような野蛮なナチス政権がどうしてドイツに誕生したのだろうか。これは政治、経済、文化などあらゆる角度から深く研究されるべき課題であろう。いまここでは、ごく大ざっぱにあらましの経過だけを辿つてみる。

オーストリアのプラウナウ生まれ

にドイツの各地に族生した極右団体の一つでしかなかったが、ヒトラーの入党を契機として反ユダヤ主義、大ドイツ主義を掲げる右翼政党に成長、1920年党名をナチスと改めた。1923年秋には党員数5万を越えていたことである。同年11月、ヒトラーは第一次大戦当時の参謀次長ルードルフをか

ナチス ——台頭から滅亡まで——



(1889年)のアドルフ・ヒトラーは1912年ミュンヘンに来てベンキ画工となつたが、第一次大戦ではドイツ軍に入隊して伍長となる。大戦後の1919年に、ヒトラーはナチスの前身ドイツ労働者党に加わった。これは大戦後の激動期

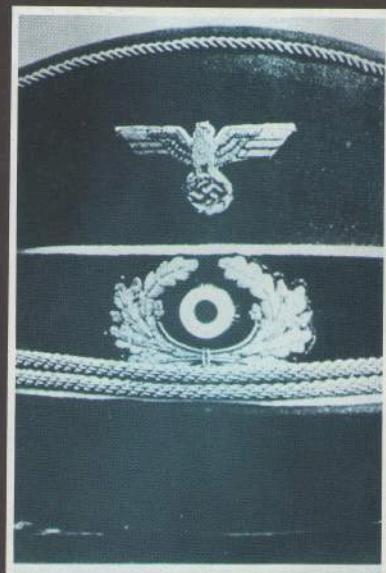
ついでいわゆる「ミュンヘン一揆」を起したが、これは失敗に終り、党は解散を命じられヒトラー自身は5年の禁錮刑に処せられる。ヒトラーはしかし、じっさいには10ヵ月ばかりで釈放され、1925年には早くも党を再建した。この

ときの獄中で、ヒトラーはのちにナチスの聖典となった「わが闘争」を口授したのである。

1929年10月、ニューヨークのウォール街に起った株式の大暴落は世界恐慌の導火線となり、大戦後の相対的安定期を迎えていたドイツでも、ふたたび激しい経済的困窮と社会不安の季節が

早稲田大学講師

北通文



はじまつた。そして、失業の増大と階級対立の激化はナチスの勢力拡大に絶好の温床を提供したのである。

ナチス結党の当初、運動の資金は党員や支持者の醸金でまかなわれ、せいぜいミュンヘンの地方実業家のカンバ

ヒトラーに賭け、ヒトラーに貢いだ大資本の代表として挙げられるのは、鉄鋼トラストの総帥ティッセンの名前である。

「ヒトラーは神話的な摸様によって遣わされた指導者として登場した。じ

が見られる程度でしかなかった。いま、世界恐慌下において、ナチスは労働者階級の革命化を怖れる大資本家の支持を受けるにいたり、急速にその勢力を増大して、1930年9月14日の国会選挙では、従来の12議席から107議席に伸びて一躍社会民主党につぐ第二党にのしかがつた。

ついに彼を遣わした《神》は——12年後に明らかになったように、賢い先見の明はなかったが——ドイツのトラストの事務室、ルール河畔はランツベルクの城郭めいたティッセン御殿に君臨していた。ドイツの世界支配のための二度目の戦争を起した者たちが、ヒトラーを全能の《指導者》の台座にのせたのだ。」(アブシュ)——大資本との結託、これがヒトラーとナチスの第三の、仮面をかなくなりすてた素顔である。

ヒトラーは、1932年4月の大統領選挙では少差でヒンデンブルクに敗れたが、同年7月の国会選挙では絶対多数を獲得した。こうして、1933年1月30日、ついにヒトラーを首相とする右翼連立内閣が成立したのである。そして、新内閣の第一着手は共産党の弾圧、第二は「全権賦与法」の議決であったのだ。

共産党の弾圧は、2月27日夜の国会議事堂放火事件を利用して行なわれた。犯人として逮捕されたのはファン・デル・ルッペというオランダの青年であったが、その黒幕はじつはナチス自身だとの疑いが濃厚であるにもかかわらず、ナチスは放火を共産主義者の仕業として、4000名の共産党役員を逮捕し、共産党の機関紙を禁止したのである。

(容疑者として逮捕された共産党国会議員団長トルグラーとブルガリア共産党員ディミトロフたちの無実はやがてライプチヒの最高法院で明らかにされた。)

政府に完全な行動の自由をあたえようとする「全権賦与法」はワイマル憲法の基本にかかる重大法案で、国会の3分の2の多数決を必要としたのだが、ヒトラーは議事堂火災の翌日に発布していた「国民と国家の防衛のため

の」緊急令を発動して反対派議員を弾圧。3月23日ついにこれを可決成立させた。こうしてナチスの一党独裁が法的にも確立され、ワイマル共和国はここにあえなく終りを告げたのであった。

「全権賦与法」によって労働組合とすべての政党を解散させたヒトラーは、いまやまっしぐらに戦争への道を邁進することができた。ベルリンをはじめ方々の都市で悪名高い「焚書」が行なわれ、ブラック・リストにのせられた多数の作家がぞくぞく国外へ亡命したのもそのころのことである。以下、年表的に主要な出来事を拾ってみると—

1934年8月、ヒトラー、ドイツ国總統に就任、国防軍ヒトラーに忠誠を誓う。

1936年3月、独軍ラインラント進駐。

同年11月25日、日独防共協定調印。(ナチスドイツの出来事がよそごとでなかったことを思いだすためにこの一項は必要であろう。) 1938年3月、独奥併合。

1年後の1939年3月、独軍プラハ進撃。

同年9月1日、独軍ボーランドへ侵入。

翌2日、英仏、独に宣戦布告、第二次大戦はじまる。1940年6月、独軍パリに入城。1941年6月22日、独軍、ソ連攻撃を開始。同年12月8日、日本、真珠湾を奇襲、太平洋戦争はじまる。

1943年1月31日、スターリングラードのパウルス元帥麾下の独軍降伏。翌1944年、ソ連軍、総反撃を開始。アイゼンハウバー麾下の米英軍もようやく北仏海岸に上陸した。ソ連軍のベルリン攻撃は1945年4月23日にはじまり、25日にはベルリン包囲を完了した。ヒトラーはその包囲下で自殺したのである。ドイツが無条件降伏文書に調印したのは5月8日で、日本はその後なお3ヶ月戦いつづけたわけである。





ファシズムとは

イタリア語のファッショfascio(複数fasci)を語源とする。ファッショは本来は束という意味であるが、転じて団体、結社を意味するようになった。

イタリアのムソリーニは、1919年〈戦闘者ファッショ〉をつくり、21年にこれを国民ファシスト党と改め、22年総理大臣となった後、ファシスト党を中心とする独裁支配をうつたてた。このようなムソリーニの運動や支配体制はイタリア語でファシズモfascismoとよばれ、その後これと同じ性質をもつものはみなファシズムという言葉であらわされるようになった。ムソリーニの政権成立当時からし

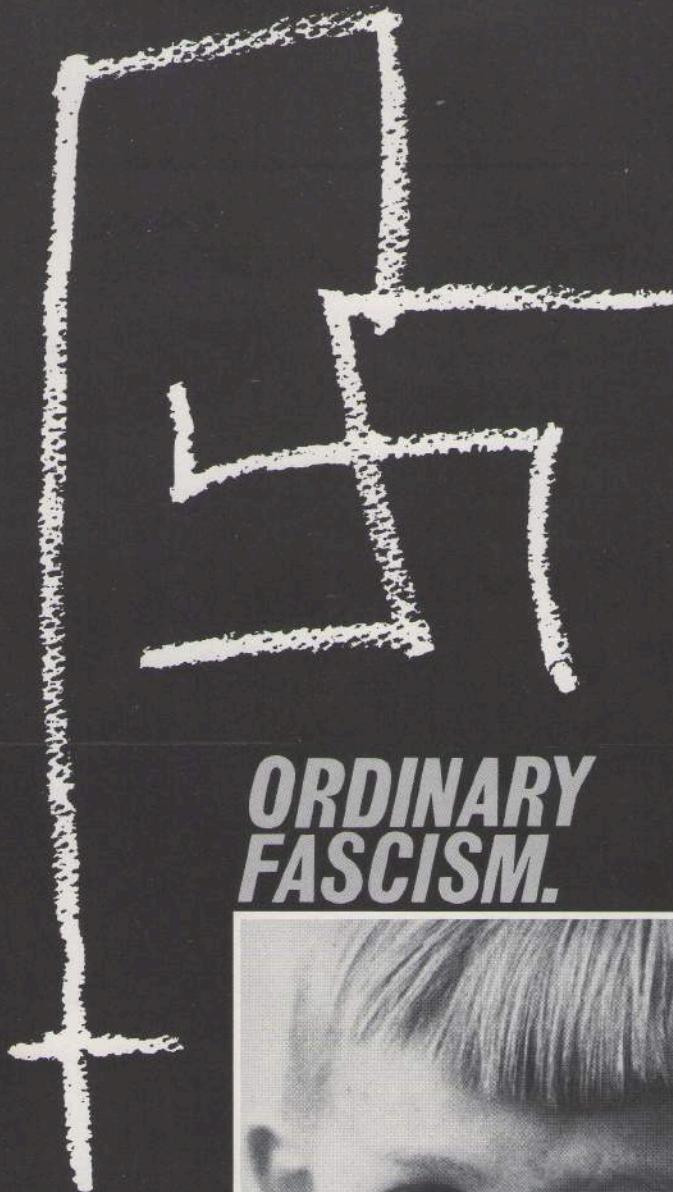
ばらくの間、ファシズムとは、資本家と労働者の両方に反対する中産階級の独裁であるとする意見もあったが、現在ではファシズムが労働者階級の革命的運動に対して危機にたつ資本主義を守るためにブルジョア的反革命的暴力支配であること、またそれが帝国主義戦争のための体制であることなどは、一般に承認されている。

現在ファシズムの定義としては、〈金融資本の最も反動的な、最も排外主義的な、最も帝国主義的な要素の公然たる暴力的独裁〉という定義が最も普通に用いられている。

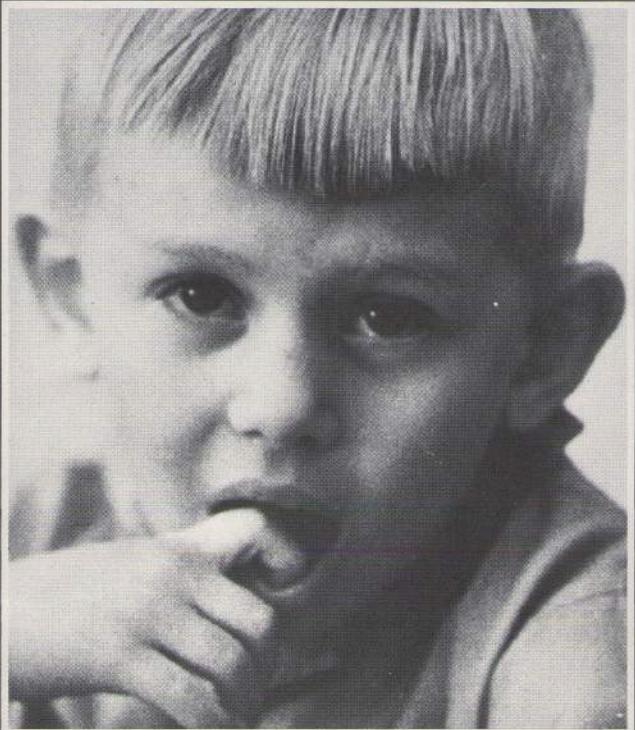
(平凡社世界大百科事典より)

ヒトラーとその時代の関係略年表

1889年 4月20日、アロイス・ヒトラーの第4子としてオーストリアのブラウナウ・アム・インに生まれる	1939年 1月、ヒトラー、国会で欧州のユダヤ人絶滅措置を宣言。9月、ドイツ、ポーランドに侵入し英仏と開戦（第2次世界大戦始まる）。9月、独ソ、ポーランド分割
1914年 8月、第1次世界大戦勃発。ヒトラーも大戦に出征する	1940年 5月、ドイツ軍、西部戦線総攻撃開始。6月、ドイツ軍パリ無血入城。
1918年 11月、第1次世界大戦終結	8月、日独伊三国軍事同盟締結。
1919年 9月、ヒトラー、ドイツ労働者党に入党	1941年 6月、ドイツ、ソ連と開戦。8月、米、英、大西洋憲章を発表。9月、アウシュヴィッツ強制収容所で毒ガス虐殺開始。12月、日本軍、真珠湾奇襲、太平洋戦争開始。12月、ドイツ、アメリカに宣戦布告
1920年 8月、ドイツ労働者党、ナチ党と改称	1942年 1月、ヒトラー、ワンゼー会議でユダヤ人絶滅措置を決定。9月、独ソ間スターリングラードの激戦
1922年 10月、ムッソリーニ、ローマ進軍	1943年 1月、スターリングラードのドイツ軍降伏。9月、イタリア無条件降伏。11月、カイロ宣言
1923年 11月、ヒトラーのミュンヘン一揆、ナチ党の禁止	1944年 6月、連合軍ノルマンディー上陸作戦。8月連合軍パリ入城、独軍東部戦線全面後退
1925年 2月、ナチ党再建大会、11月、ヒトラー、親衛隊を創設	1945年 2月、ヤルタ会談はじまる。4月、ロシア軍、ベルリン包囲。4月、ムッソリーニ、射殺。4月30日、ヒトラー・ピストル自殺。5月首都ベルリン陥落。5月ドイツ無条件降伏。7月、ボツダム会談。8月、日本無条件降伏、太平洋戦争終る。
1926年 ドイツ、国際連盟加入	
1929年 ニューヨーク株式大暴落	
1932年 3月、ヒトラー、ドイツ大統領選挙に立候補。7月、ナチス党第1党となる	
1933年 1月、ヒトラー内閣成立、首相に就任。9月、ユダヤ人弾圧のニュールンベルグ法発布。10月、ドイツ、国際連盟脱退	
1934年 8月、ヒンデンブルグ大統領死去。ヒトラー、その後継者として首相兼総統に就任	
1937年 11月、日独防共協定調印	
1938年 3月、ドイツ、オーストリアを併合。5月、ヒトラー、チェコ攻撃秘密指令	



ORDINARY FASCISM.



DIRECTION : MIKHAIL ROMM
SCRIPT : MIKHAIL ROMM
: MAIYA TUROVSKAYA
: YURI HANYUTIN
CAMERA : HERMAN LAVROV



**ORDINARY FASCISM.
LE FASCISME TEL QU'IL EST.
EL FASCISMO CORRIENTE.**

昭和46年9月23日印刷
昭和46年9月24日発行

発行所 東京都千代田区有楽町1-14 東宝株式会社事業部
発行者 東京都千代田区有楽町1-14 内田 和也
発行権者 千代田区神田須田町1の23の2 大木須田ビル
日本海映画株式会社
印刷所 東京都港区赤坂1-4-4 成莊印刷株式会社